

## 史料翻刻

# 川西町佐藤家文書の紹介と翻刻(1)

## 天明元年「湯殿山道中記」

小林 文雄

### はじめに

本稿では、二〇一六年に本学法人図書館に寄託された「佐藤家文書（山形県川西町）」中の旅行関係史料について紹介し、あわせてそのなかで最も古い天明元年（一七八九）の「湯殿山道中記」を翻刻する。

### 一、「佐藤家文書」中の旅行関係文書について

「佐藤家文書」は、米沢藩の上高山村で肝煎をつとめた佐藤又右衛門家に伝わる文書群である。上高山村は米沢城下の北方、黒川の東方に位置する村落で、「上杉領村目録」では上高山村と下高山村をあわせて高山村としている。高山村は、享和二年の改めで、村高四一・一五石余、戸数一四〇軒、人口七七六人、三〇七町七反余のうち田地が二・三六町三反余を占めている。領地は給人地と藩の蔵入地に分かれ、安永八年分限帳によれば、給人数は二・二名である。<sup>(1)</sup>

佐藤家文書は、①村の運営に関わる文書群、②佐藤家の農業経営に関わる文書群、③佐藤家の家族に関わる文書群、に大きく分けられる。③の文書群には、佐藤家家族が授受した個人書簡・はがき類、絵はがき、賞状、日記類、領収書、書籍・雑誌・地図類、等が含まれる。なかでも特筆すべきは、佐藤家が代々受け継いできた近世後期から昭和三〇年代までの一千

点以上にわたる書籍や雑誌が一括して寄託されたことである。このことにより、当該地域の教育・学術活動の展開を家族または個人のレベルで跡づけることができる史料群となっている。<sup>(2)</sup>

旅行関係の文書は、紐で括られた状態で現存していたものと、内容の異なる他の文書に交じって単体で存在していたものがあり、それらを合わせる一〇〇点を超える。

佐藤家文書の収納には、葛籠、木箱、紙箱、段ボールなど数種類の容器が使用されており、その葛籠のひとつに、道中記や絵図を多く含んだ文書類が紐で括られた状態で収納されていた。それにたいして、一々数点の道中記や地図などが、その他の葛籠や段ボール箱のなかに収められている事例も散見された。

紐で括られた状態の旅行関係文書が入っていた葛籠（箱番号3・写真図版①）には、近世後期から明治期にかけての金子借用証文、人足元揃帳、地図（地籍図）などが入っており、そのほとんどが整理されて紐で括られた状態で収納されていた。道中記や絵図類が多く含まれていたまともには整理番号3―26の束で、そのなかには番付や寺社縁起などの出版物も入っており、おそらく旅先で入手したものであるために道中記類と一緒に保存していたのではないかと思われる（写真図版②参照）。



図①



図②

3―26の総点数は九一点、作成年代が判明する史料のなかで最も古いのは文化十四年（一八一七）の「相馬国妙見祭祀見物道中記」、下限は一八九四年（明治二七）の「日清韓明細全図（東北日報第一二七号附録）」となっており、約八〇年に及ぶ期間の文書が一括されている。

3―26に含まれる道中記を参詣先ごとに分類すると、伊勢参宮（六冊）、湯殿山（四冊）点、金華山（二冊）、相馬妙見祭（一冊）、飯豊山・会津柳津（一冊）、となる。また、道中記は記されていないが、案内図が残っていることから、日光に参詣した可能性も考えられる。

六冊の伊勢参宮道中記は、表紙が失われて年不詳のものを除くと、安政四年）、明治五年（一八七二）、明治十三年（一八八〇）の年紀があり、そのうち明治五年と十三年の道中記は各二冊ずつ残っている。また、湯殿山の道中記は、明治一年、一二年、一三年、一六年の四冊ある。

参詣以外の旅行では、明治に入ってから温泉入浴の記録と、東京横浜見物の道中記がある。温泉は、五色湯と赤湯の入浴旅行が多いが、滑川温泉も一点ある。

絵図・地図類には、文政年間出版の「道中案内図」文久三年（一八六三）改判「大日本早引細見絵図」などの全国地図、奥州松島塩竈、鎌倉江島金沢、

近江八景などの名所風景図、塩竈神社境内、大和国長谷寺、四国八十八箇所五剣山八栗寺、下野国流出山などの参詣場所を描いた地図がある。

そのほか、一枚刷りの刷物や番付、宿屋札、神風講・真誠講といった旅行関係業者の発行物、参詣地で発行された縁起などが一括されていた。たとえば、幕末から明治にかけての「相撲番付」、「浄瑠璃大夫見立て角力」、文政十三年（一八四二）「三ヶ津太夫三味線人形見立角力」、明治二五年（一八九二）の歌舞伎座筋書、二枚の「豆州相州武州上総下総房州 海陸御固御場所附」など、江戸・東京で入手したと思われる刷物が含まれている。このように、3―26の一括史料は、参詣行動を家または個人のレベルで通時的に跡づけ、旅がもたらした情報についても知ることができる史料群といえよう。

ただし、道中記や地図のなかには、葛籠や段ボールのなかに単体で入っているものや、ほかの一括文書のなかに入っていたものもあった。今回紹介する「湯殿山道中記」も、そのひとつである。

## 二、「湯殿山道中記」について

この「湯殿山道中記」は、「明治の書類 H18 9月整理」と記された段ボール箱の底に入っていたものである。この段ボール箱（箱番号28）内には、佐藤家の不祝儀帳や稲刈帳などが紐で括られた状態で収納されていたが、道中記との関連は不明である。道中記は横帳で表紙を含め五丁からなっている。表紙には「天明元年牛ノ六月吉日／湯殿山道中記／佐藤又右衛門」と記され、管見の限り佐藤家文書中では最初の道中記である。

出羽三山信仰に関する研究は、戸川安章氏、岩鼻通明氏、原淳一郎氏をはじめ膨大な蓄積があり、庶民の記した出羽三山の道中日記も多数紹介されている<sup>(3)</sup>。今回、それに新たな知見を加えるのではなく、屋上屋を架すことになるが、佐藤家文書のなかでは最も古い道中記であることに鑑

み、あえて翻刻を試みることにした。

(1) 『角川 日本地名辞典 山形県』

(2) 拙稿「山形県公立大学法人図書館寄託史料「佐藤家文書」目録(1)―検地関係史料―」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四八号、二〇二一年)

(3) 出羽三山信仰に関する代表的な研究として、戸川安章『戸川安章著作集I 出羽三山と修験道』(岩田書院、二〇〇五年)、岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』(名著出版、一九九二年)、同『出羽三山信仰の圏構造』(岩田書院、二〇〇三年)、原淳一郎『近世の旅と藩 米沢藩領の宗教環境』(小さ子社、二〇二二年)が挙げられる。原淳一郎氏は、右の著書のなかで、置賜地方で湯殿山参詣の習俗が成立した背景について、米沢藩の宗教政策や成人儀礼習俗と関連させて論じている。同じく原淳一郎『東北地方における山岳信仰と信仰儀礼―置賜地方』(『山岳修験』五六号、二〇一五年)、同「南東北における伊勢参宮と湯殿参詣の意義」(『宗教民俗研究』三二、二〇二二年)も参照されたい。

また、出羽三山道中記の翻刻は、岩鼻通明『出羽三山参詣道中記史料集』(山形大学教養部、一九八六年)、同「新出の月山湯殿山参詣道中記について」(『山形民俗』二二、二〇〇七年)のほか、各自治体史でも取り上げられている。

#### (凡例)

一、史料の翻刻に当たっては、原文書の形に沿うようにつとめた。改行位置は原文書のままとした。

二、漢字は、原則として常用漢字とした。

三、適宜、読点(・)を加えた。

四、カギカッコを用いて丁の表裏を示した。

(表紙)

「天明元年牛ノ六月吉日

湯殿山道中記

佐藤又右衛門」(二丁表)

一 高山 一より

一 新戸へ 六り

一 大瀬へ 弐り

間ニ御判所有

一 大舟木へ 壱り

一 松ほとへ 壱り

一 太郎へ 壱り

右ニ六月十一日晚大宝院へ

はたこ百弐拾文ニて泊り

一 立木へ 十八丁

一 十郎畑へ 壱り

十四丁 一(二丁ウラ)

一 青柳へ 壱り

一 南又へ 壱り

此間ニ御別当御前坂大山有

一 大井沢へ 壱り半

間ニあけ羽之茶屋有

一 志津へ 三里

六月十二日源右衛門へ泊り

野菜代百四十壱文ニ而

三度賄

外二にぎりめし

茶

一 御山

無のり

右より下向いたしうばより月山登

りいたし、観音堂有

大山成りのり不知

間ニ鍛冶小屋有、中喰いたし候

牛がくび小屋有、月山御たけより判請

可申候、但し御山役銭之義ハ百五拾壺文

出し申候・

一 月山

右同断

右より下り申候・行者戻し

小屋有・ふす池有

「(二丁表)

弥陀が原判所有

御たけより請申候判右ニて

改判銭六文つゝとり右判

相返シ申候、右之方ニ

弘清水有、茶屋く

沢山有、大満虚空蔵

前ニ茶屋有、是ニ而月山判上ケ

申所成り

一 羽黒へ

九里

石ばね三り

木立 三り

右御本坊薬王寺

町下宿正常坊へ六月十三日泊り

はたこ百式拾文、是より十四日朝

別当へ上り御山役百壺文つゝ、

出し、くんろう請申候、酒も

出申候、末社百壺有

御堂言語ニ難尽

一 かり川へ

式り

一 新井堀へ

三り

右出口ニ渡し有、坂田迄

(二丁裏)

舟ニ乗り舟ちん式拾五文

御定法増舟ちん式拾五文

ノ五十文ニて坂田迄のり申候

一 坂田へ

式り

左り二いのり山見へる

六月十四日同十五日二夜泊り

宿南蔵院はたこ壺夜

百式拾文つゝ、東前司有馬

かみ城あり、入口ニ御蔵

三十壺有、新町廻り

砂山之上ニ山王権現御立

則拝シ、けらし山へ登り

海浦見る、小屋之さま

袖乃浦見へる、沖ニ大舟

数多ク見へる、四方へ柵立

かや野三り

天下ノ御米積立所国々より  
田屋蔵数多ク有

本明海ト申一世御行

則身則仏ニ罷成り砂高山

海向寺と号、日和山

石円有、其より

「(三丁表)

寺拝見、林正寺法蔵

宗明宝寺、其より千日

寺と申所ニ定念仏有

其より砂山へ登り浄土真宗

亀崎山浄福寺と申

大からん有、東門跡なり

其より右同宗ニて安乗寺

十四間三尺四面なり是も

東門跡、大石寺是ハ

十間四面大からんなり

西門跡

一新井堀へ又二り戻り

船ちん式拾五文出し申候

一 落合へ

壱り半

弘川有、船ちん七文出し

一 横山へ

二り

梵字川舟ちん式拾五文

「(三丁裏)

一 鶴岡

式り

御城下酒井左衛門様

御知行十四万八千石

言語ニ不及よき所なり

一金峯山

壱り半

此所ニ座玉 大権現御立

上下二而壱り廻り酒井

左衛門様御寄進

壱り行梵字川

舟渡し有、舟ちん式拾文

出し申候

一 松根

壱り半

六月十六日太次右衛門へ泊り

百文ニて中喰呉申、泊りて

能所なり、十王峠有

一 注蓮寺へ

二里

一 大あみへ

十八丁

別当大日坊大からんなり

此所ニて長右衛門頼通り判

「(四丁表)

取り貰申候、判銭

三十五文出ス

一 田むき又へ

壱り半

右所ニ御番所有、通り

御判指上申候、間二又

茶屋く沢山有

一 笹小屋へ

壱り拾六丁

一 志津

三り

六月十七日源右衛門へ

泊り、大あみより此所  
迄六拾里越仕申候  
峠々有

一 四ッ屋へ 壱り八丁

一 砂小関へ 貳拾八丁

一 本道寺へ 壱り  
「(四丁裏)

一 入間へ 壱り

一 よし川へ 貳り

一 左沢へ 二り

出口町青苧引こ有

もとめてよし、舟

渡し有、舟ちん十五文

御定法なり

一 山のべへ 三り

一 はせとへ 三り拾貳丁

間ニ四ッ屋と申所にあま

酒名物なり

一 上ノ山へ 壱り貳拾

一 中山へ 四丁

一 赤湯へ 貳り

一 高山へ 三り

貳り  
「(五丁表)

(裏表紙)

「天明元年

丑ノ六月十一日二立

同廿日下向仕候

「(五丁裏)